

例言

1. 本書は、宅地分譲工事に伴う貝沢・烏道跡の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 本道跡は、群馬県高崎市貝沢町字烏792番地2・792番地6に所在している。
3. 本調査および整理作業は、事業者・高崎市・有限会社毛野考古学研究所による三者協定を締結し、高崎市教育委員会の指導のもと、委託を受けた有限会社毛野考古学研究所が実施した。
4. 発掘調査から整理作業を経て本書刊行に至る経費は、群馬グランディハウス株式会社に負担して頂いた。
5. 発掘調査は、石丸敦史（有限会社毛野考古学研究所）が担当した。
6. 発掘調査・整理作業は、平成25年9月17日～平成26年3月25日の期間で実施した。
7. 本道跡は、高崎市教育委員会の遺跡調査番号で「574」である。
8. 本書の執筆についてはIを高崎市教育委員会、それ以外を石丸が行った。
9. 本書に関わる資料は、一括して高崎市教育委員会が保管している。
10. 発掘調査・整理作業に携わった方々は以下の通りである。

【発掘調査】

青柳美保 井口ヒロ子 狩野友好 亀田浩子 竹生正明 森山恵子

【整理作業】

青柳美保 小野沢絹子 亀田浩子

凡例

1. 挿図中の北方位は座標北を、断面水準線数値は海拔標高を示す。座標は世界測地系を用いている。
2. 遺構図および遺物実測図の縮尺については、図中にスケールを付けて表示した。遺物観察表の計測値で用いた単位はcm、gである。
3. 土器の色調観察は【新版 標準土色帖】（農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修2006）を用いた。
4. 土層説明における含有物の量は、多量（50～30%）・中量（25～15%）・少量（10～5%）・微量（1～3%）と表記した。
5. 本書掲載の第1図は高崎市発行1/2,500「高崎市都市計画基本図」、第2図は、国土地理院発行1/200,000地勢図「長野」・「宇都宮」、第4図は、国土地理院発行1/25,000地形図「高崎」を一部改変引用した。
6. 遺構略称は、溝：SD、土坑：SK、ピット：Pとした。

目次

例言

凡例

目次

I 調査に至る経緯	1	V 遺構と遺物	5
II 地理的・歴史的環境	2	1 概要	5
1 地理的環境	2	2 溝	7
2 歴史的環境	2	3 土坑	10
III 調査の方法と経過	4	4 遺構外出土遺物	19
1 調査の方法	4	VI まとめ	21
2 調査の経過概要	4	報告書抄録	
IV 基本層序	4		

図表目次

第1図 調査区位置図	1	第13図 SK-12・13・14号土坑	14
第2図 遺跡の位置	2	第14図 SK-2・4・7・8・9号土坑出土遺物	16
第3図 周辺の遺跡	3	第15図 SK-10・11・12・14号土坑出土遺物	17
第4図 基本層序	5	第16図 遺構外出土遺物	20
第5図 遺跡概要図	5	第17図 時期別遺構分布図	22
第6図 遺構全体図	6	表1 遺構別出土遺物量一覧	7
第7図 SD-1・SD-3号溝	8	表2 SD-1・SD-2出土遺物観察表	10
第8図 SD-2号溝	8	表3 土坑出土遺物観察表(1)	18
第9図 SD-4号溝・SK-6号土坑	9	表4 土坑出土遺物観察表(2)	19
第10図 SD-1号溝・SD-2号溝出土遺物	10	表5 遺構外出土遺物観察表(1)	19
第11図 SK-1・2・3・4号土坑	12	表6 遺構外出土遺物観察表(2)	21
第12図 SK-5・7・8・9号土坑	13		

写真図版目次

PL1 南調査区全景	PL2 SK-4号土坑全景	PL3 基本土層 I
北調査区全景	SK-5号土坑埋検出状況	基本土層 II
南調査区西部全景	SK-5号土坑断削状況	PL4 SD-1・2・SK-2出土遺物
SD-1・SD-3号溝全景	PL3 SK-8号土坑遺物出土状況	PL5 SK-2・4・7・8出土遺物
PL2 SD-2号溝全景	SK-8号土坑全景	PL6 SK-8・9・10出土遺物
SD-4号溝・SK-6号土坑全景	SK-12号土坑全景	PL7 SK-10・11・12・14出土遺物
SK-1号土坑全景	SK-14号土坑全景	PL8 SK-14・遺構外(1)出土遺物
SK-2号土坑全景	SK-14号土坑土層断面	PL9 遺構外(2)出土遺物
SK-3号土坑全景	SK-9号土坑全景	PL10 遺構外(3)出土遺物

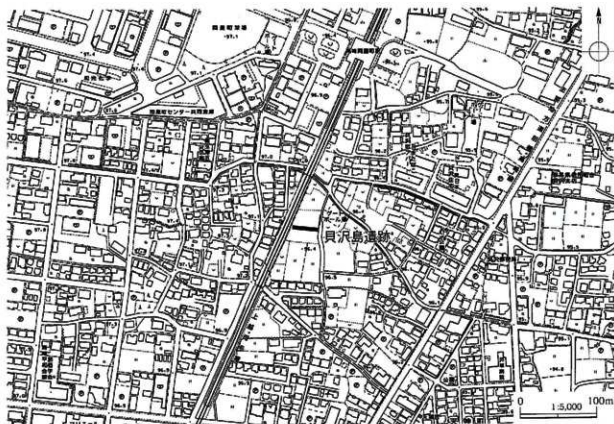
I 調査に至る経緯

平成22年10月、塚越榮子氏（以下土地所有者）より高崎市教育委員会（以下市教委）に宅地造成工事予定地の埋蔵文化財の状況について照会があった。市教委は、照会地は埋蔵文化財包蔵地であるため、試掘調査による確認を実施し工事と埋蔵文化財保護との調整が必要な旨を回答した。

同年11月16日付けで土地所有者より試掘調査申込書が提出されたのを受けて、市教委は同年12月13日に工事予定地の試掘調査を実施し、平安時代の遺構を確認した。

この試掘内容と保存協議が必要な旨を、同年12月22日付けで土地所有者に通知した。その後、保存協議の進捗はなかったが、平成25年8月になり開発計画が変更されて改めて群馬グランディハウス株式会社（以下事業者）より文化財保護法93条と共に当該地の埋蔵文化財について照会された。平成22年の試掘結果と変更開発計画により埋蔵文化財保護について事業者と協議を行ったが、建設予定の変更は不可能ということなので、開発予定地の内道路建設部分について記録保存の発掘調査を行うことで合意した。

発掘調査は、市教委の作成する調査仕様書に基づく指導・監理の下、有限会社毛野考古学研究所に委託して実施することとなり、平成25年9月3日付けで高崎市教育長・事業者・毛野考古学研究所の三者協定を締結し、さらに協定に基づき平成25年9月3日付けで事業者と毛野考古学研究所の二者で発掘調査委託契約が締結された。



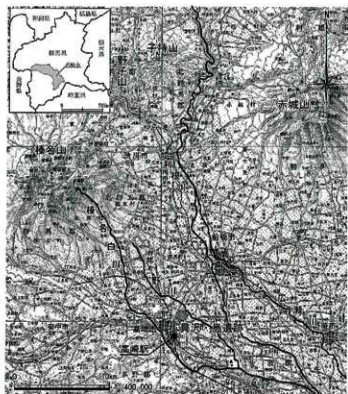
第1図 調査区位置図

II 地理的・歴史的環境

1 地理的環境

貝沢・烏遺跡は、井野川右岸に位置し、その標高は約96m前後を計測する。遺跡周辺は井野川低地帯と呼ばれる低湿地が広がり、井野川の支流となる小河川が多く流れている。そのため井野川の流路に沿うように微高地と低地が入り混じり複雑な地形をなしている。本調査区は西側から続く微高地縁辺部に位置し、その東側には低地が広がる。

明治前期の迅速測図を見ると、小規模な微高地上に集落が点在し、低地には広く水田が広がっていることがわかる。ただし、現在は市街地化が進み、旧来の地形は失われつつある。本調査区も以前は畑が営まれ、地元の方によると、東側の低地部分は沼地のようになっていたそうである。現地表下約50cmで湧水が認められ、同様の状況は周囲で広く認められるそうである。



第2図 遺跡の位置

2 歴史的環境

縄文時代

本遺跡周辺では縄文時代の遺構は確認されていない。

弥生時代

弥生時代では中期以降に遺構が確認されるようになる。浜尻遺跡(8)・稲荷町I遺跡で弥生時代中期、上大類北宅地遺跡では弥生時代後期の竪穴住居跡が認められている。また井野川左岸では、小八木I遺跡(25)・日高遺跡群(28)・新保遺跡(29)においてAs-C軽石層下の水田跡が検出されている。とくに日高遺跡群では平安時代まで継続して水田が営まれ、長く生産域となっていたことがわかる。

古墳時代

古墳時代になると遺跡数はさらに多くなる。竪穴住居跡が確認されている浜尻遺跡・稲荷町I遺跡(17)・上大類薬師遺跡(21)・上大類北宅地遺跡(23)など井野川右岸の微高地上に集落が展開している。

それに伴うように古墳・墳墓も古墳時代前期から営まれている。貝沢柳町遺跡(20)では古墳時代の周溝墓が確認され、その周溝内からパレス壺など東海系の要素を有する土器が出土している。また貝沢柳町遺跡では古墳時代中期初頭に位置づけられる埴輪円筒棺が確認されている。6世紀後半段階には、浜尻天王山古墳(B)や銅鏡の出土した五雲神社古墳(C)などの前方後円墳が認められる。また祭祀遺構も確認されており、貝沢I遺跡(9)・井野川遺跡(7)では、土器と石製機造品の集積が認められた。



1. 貝沢・島遺跡 2. 大八木屋敷遺跡 3. 下小島町頭Ⅱ遺跡 4. 大八木水田遺跡 5. 下小島遺跡 6. 間原町遺跡 7. 井野川遺跡 8. 浜尻遺跡 9. 貝沢Ⅰ遺跡 10. 飯塚新田西Ⅱ遺跡 11. 飯塚大道東遺跡 12. 飯塚西金井遺跡 13. 飯塚東金井遺跡 14. 飯塚金井Ⅱ遺跡 15. 飯塚十二前遺跡 16. 飯塚南代遺跡 17. 稲荷町Ⅰ遺跡 18. 飯玉Ⅰ遺跡 19. 日光町遺跡 20. 貝沢柳町遺跡 21. 上大類薬師遺跡 22. 上大類八反田遺跡 23. 上大類北宅地遺跡 24. 天田・川俣遺跡 25. 小八木Ⅰ遺跡 26. 小八木Ⅱ遺跡 27. 井野矢ノ上遺跡 28. 日高遺跡群 29. 新保遺跡 30. 貝沢・天神遺跡 A. 真指寺古墳 B. 浜尻天王山古墳 C. 五堂神社古墳 D. 聖天山古墳 E. 桶町Ⅱ遺跡（円墳） F. 貝沢八幡屋敷 イ. 西沖屋敷 ウ. 塚越屋敷

第3図 周辺の遺跡

生産遺跡は古墳時代になると井野川右岸においても確認されるようになり、下小島町頭Ⅱ遺跡（3）では、AsC層下の古墳時代初頭とされる水田区画が検出されている。

奈良・平安時代

奈良・平安時代における集落遺跡の分布は、古墳時代と比べるとやや散漫になる。その一方で、As-B層石層下の水田遺構が確認され、大八木水田遺跡（4）・下小島遺跡（5）・飯塚新田西Ⅱ遺跡（10）・日光町遺跡（19）・上大類八反田遺跡（22）・貝沢・天神遺跡（30）など、井野川右岸の広い範囲で水田開発が行われていたことが判明している。大八木水田跡においては大畦畔や水路が検出され、条里制による地割りが行われていたと考えられる。周辺の水田遺構においても同様の走行方向をなしており、条里制の地割りの存在が窺える。

中世

中世では本遺跡の周辺において貝沢八幡屋敷（ア）・西沖屋敷（イ）・塚越屋敷（ウ）などの城館址が推定されている。とくに新井若狭守によって築かれたとされる貝沢八幡屋敷は本調査区東側を南北に走る市道が屋敷外郭の西端に推定されている。山崎一によると、方形の外郭内の東北寄りに約60m四方の本郭とその南に五角形の二の郭が想定されている（山崎一1972『群馬県古城址の研究』）。本郭西側の薬師塚と記載のある個所は現在でも鳥状に一段高くなっており墓地として現存している。

Ⅲ 調査の方法と経過

1 調査の方法

表土除去は、0.25㎡バックホーを用いて行った。それぞれ表土除去後、人力による遺構検出および遺構掘削を行った。遺構掘削は、適宜ベルト設定および半載を行い、土層堆積状況を記録した。

遺構測量は、トータルステーションおよび電子平板を用い、平面図および断面図を作成した。各測量データは DXF 形式に書き出すことによって汎用性を持たせた。なお座標は世界測地系を使用した。遺構写真は、調査の進捗状況に応じて行い、35mm モノクロ・35mm カラーリバーサル・デジタルカメラ（1,200 万画素相当）を使用した。

遺物接合は、溶剤系接着剤（セメダイン C）を用い、エポキシ系樹脂で部分的に補強した。遺物の写真撮影は、センサーサイズ APS-C のものを使用した（Nikon D7000）。遺構・遺物トレース、写真加工、版組はそれぞれ Adobe IllustratorCS2、Adobe Photoshop6、Adobe InDesignCS2 を使用した。

2 調査の経過概要

現地での発掘調査は 2013 年 9 月 17 日～2013 年 10 月 10 日まで行った。

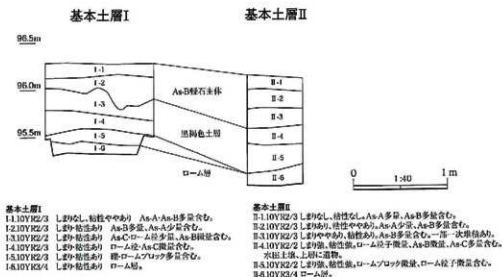
- 9 月 17 日 機材・仮設トイレ搬入。
- 9 月 18 日 重機による表土除去作業。
- 9 月 19 日 重機による表土除去作業完了。作業員による遺構検出作業。
- 9 月 20 日 遺構掘削継続。土坑の調査を順次行っていく。
- 9 月 24 日 南調査区東側低地部分をトレンチにより遺構確認を行う。
- 9 月 26 日 北調査区遺構確認ののち遺構掘削開始。
- 9 月 30 日 検出された遺構を全て完掘。全景写真撮影。
- 10 月 1 日 補足調査開始。風倒木痕内の遺構確認作業。
- 10 月 7 日 高崎市による完了検査。
- 10 月 9 日 補足測量。機材・仮設トイレ等撤収。
- 10 月 10 日 現場引渡し作業。現場作業完了。

Ⅳ 基本層序

基本層序は南調査区で 2ヶ所トレンチを設けて確認した。基本土層Ⅰは南調査区西部、微高地上に、基本土層Ⅱは南調査区東部、低地部に設定した。

層序は最上層に As-B 軽石を多く含む暗褐色土層（Ⅰ-1・2層、Ⅱ-1・2・3層）が堆積する。低地部の一部で As-B 軽石の純層に近い堆積が認められた（Ⅱ-3層）。その下には As-C 軽石をおもに含む黒褐色土層（Ⅰ-3・4層、Ⅱ-4・5層）が堆積する。低地部のⅡ-4層は、粘性が強く、鉄分の沈着が認められることから水田土壌の可能性が考えられる。微高地部で認められたⅠ-5層はロームブロックとともに準大の礫を含んでおり、一部礫はローム層中に及んでおり、水成堆積の可能性が考えられる。

遺物は黒褐色土上面、Ⅰ-3層・Ⅱ-4層上面で検出されたのみで、それ以下では全く出土していない。遺構は現地表面下約 50cm、As-B 混土層（Ⅰ-2層、Ⅱ-3層）直下で検出した。



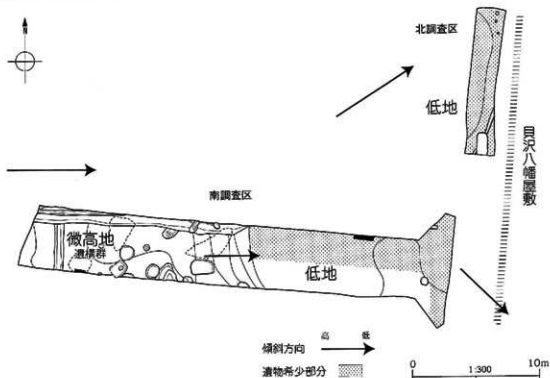
第4図 基本層序

V 遺構と遺物

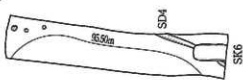
1 概要

本調査では調査区は2ヶ所設定し、それぞれ「北調査区」「南調査区」と呼称した。調査区部分は現況ではおおよそ水平な地形をなしているが、旧地形は南調査区西部が微高地になっており東の低地へ向かって傾斜している。とくに南調査区中央部分において微高地から低地への落ち込みが確認された。

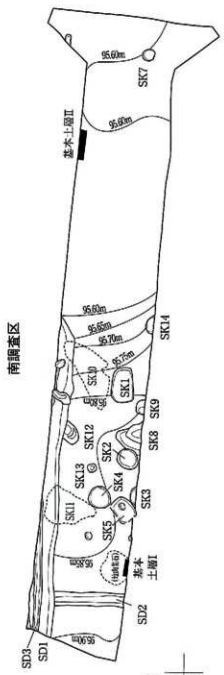
遺構は溝4条・土坑14基・ピット3基が検出された。それらはおもに南調査区西部、微高地上で認められた。



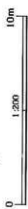
第5図 遺跡概要図



北調査区



南調査区



第6図 遺構全体図

掘立柱建物跡の柱穴と考えられる土坑（SK-5）も確認されたが、明確なものは推定できなかった。遺物はおもに南調査区西部、微高地上および南調査区東部、低地南側で出土しており、それ以外の所では皆無に等しかった。各遺構別の遺物重量は表1の通りである。

表1 遺構別出土遺物量一覧

遺構名	土師器	須恵器	灰釉陶器	陶器	瓦	埴・石器	非土器	遺構名	土師器	須恵器	灰釉陶器	陶器	瓦	埴・石器	非土器
SD-1	979	1,338	26					SK-9	17	41					
SD-2	459	222						SK-10	123	583					
SK-1	64	167						SK-11	42	152					7
SK-2	53	196	2					SK-12	84	95					
SK-4	234	88				193		SK-14	114	320					
SK-5	5	7						南調査区検出	4,196	6,475	195			214	
SK-7	30	51						北調査区検出	53	107			4		
SK-8	1,200	1,307													重量：g

2 溝

溝は南調査区で3条、北調査区で1条、計4条確認された。その覆土から大きく二つに分けられ、SD-1・SD-2・SD-4号溝は覆土にAs-B 軽石を含み、SD-3号溝はAs-B 軽石を含まない。

SD-1（第7・10図）

規模：長さ[16.9]m、幅[1.6]m、深さ[58]cm。

遺構所見：西から東へ向かってまっすぐ走った後、北方向へ屈曲するものと想定される。断面は2段に掘り込まれ、その覆土にはAs-B 軽石を含む。自然埋没と考えられる。SD-3号溝と重複し、本溝の方が新しい。堆積土に明確な流水の痕跡は認められなかったが、調査中には湧水による流水があった。また東端部において北方向への屈曲が窺えることから、区画溝の可能性が考えられる。

遺物所見：遺物には土師器片979g、須恵器片1338g、灰釉陶器片26gがあり、いずれも覆土中から出土している。そのうち図化したものには、土師器坏2点（1・2）、土師器甕（3）、須恵器甕（4）、須恵器瓶（5）、灰釉陶器碗（6）がある。覆土がAs-B 軽石混泥土層であることから、いずれも本遺構に帰属するものではなく混入と判断される。

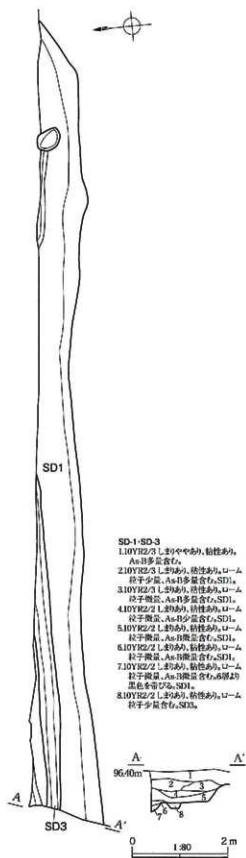
時期：覆土がAs-B 軽石混泥土層であること、またAs-A 軽石を含まないことから中世に帰属する可能性が高いものと考えられる。

SD-2（第8・10図）

規模：長さ[4.9]m、幅1.1m、深さ53cm。

遺構所見：南北方向にまっすぐ走る。断面は逆台形を呈し、その立ち上がりは西側が高く、東側が低い。これは本調査区の西側に微高地が広がり、東側に低地が広がる旧来の地形を反映したものと考えられる。覆土にはAs-B 軽石を多く含み、溝底面には地山由来の礫が一部露出する。流水の痕跡は認められなかった。SD-1・SD-3号溝と重複し、SD-1号溝より古いことが確認された。SD-3号溝とは明確な重複関係は把握できなかったが、その覆土含有物から本溝の方が新しいと判断した。

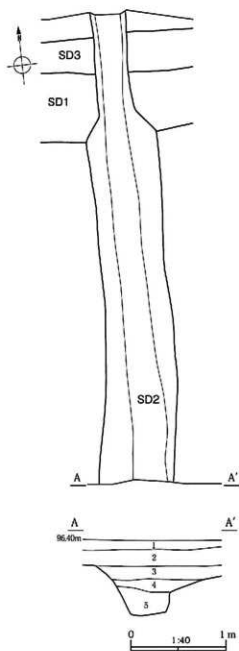
遺物：土師器片459g、須恵器片222g出土している。そのうち図化したものは、土師器坏（1）・須恵器坏（2）である。覆土がAs-B 軽石混泥土層であることから、いずれも本遺構に帰属するものではなく混入と判断される。時期：覆土がAs-B 軽石混泥土層であること、またAs-A 軽石を含まないことから中世に帰属する可能性が高い。



SD-1・SD-3

- 1.10YR2/3 L.20%あり、粘性あり、As:多量含む。
- 2.10YR2/3 L.20%あり、粘性あり、ローム粒子少量、As:少量含む、SD1。
- 3.10YR2/3 L.20%あり、粘性あり、ローム粒子微量、As:多量含む、SD1。
- 4.10YR2/2 L.20%あり、粘性あり、ローム粒子微量、As:少量含む、SD1。
- 5.10YR2/2 L.20%あり、粘性あり、ローム粒子微量、As:少量含む、SD1。
- 6.10YR2/2 L.20%あり、粘性あり、ローム粒子微量、As:少量含む、SD1。
- 7.10YR2/2 L.20%あり、粘性あり、ローム粒子微量、As:少量含む、6層2の黒色を帯びる、SD1。
- 8.10YR2/2 L.20%あり、粘性あり、ローム粒子少量含む、SD3。

第7図 SD-1・SD-3号溝



SD-2

- 1.10YR2/2 L.20%あり、粘性あり、操作土。
- 2.10YR2/3 L.20%あり、粘性あり、As:A微量、As:多量含む。
- 3.10YR2/3 L.20%あり、粘性あり、ローム70%少量、ローム粒子微量、As:多量含む。
- 4.10YR2/3 L.20%あり、粘性あり、ローム粒子微量、As:多量含む。
- 5.10YR2/3 L.20%あり、粘性あり、As:多量、細微量含む。

第8図 SD-2号溝

SD-3 (第8図)

規模：長さ [7.1] m、幅 [0.4] m、深さ 12cm。

遺構所見：SD-1号溝内で検出され、その走行方向はSD-1号溝に平行する。SD-1号溝と覆土が異なることから、それとは別の溝と判断した。断面は逆台形を呈し、覆土にはAs-B軽石を含まない。

遺物所見：遺物は出土していない。

時期：覆土にAs-B軽石を含んでいないことや周辺で出土している遺物の時期等から古代に帰属する可能性が考えられる。

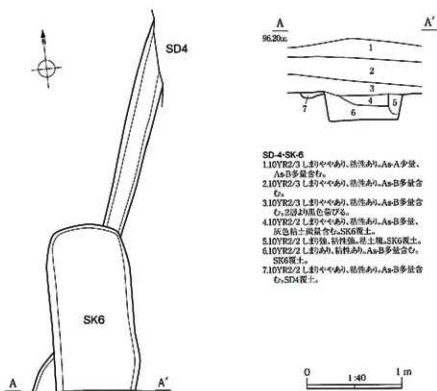
SD-4 (第9図)

規模：長さ [3.7] m、幅 0.3 m、深さ 6 cm。

遺構所見：北東-南西方向にはほぼまっすぐ走る。断面は浅い台形を呈し、覆土にはAs-B軽石を多量に含む。小規模な溝で、耕作に関連するものと考えられる。SK-6号土坑と重複し、本溝の方が古い。

遺物所見：遺物は出土していない。

時期：本遺構に帰属する遺物はないが、覆土がAs-B軽石混土であることから中世の可能性が考えられる。

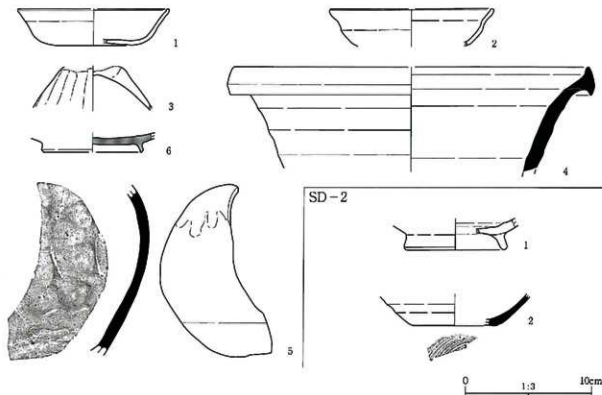


第9図 SD-4号溝・SK-6号土坑

SD-4-SK-6

- 1.10YR2/3 しまりややあり、褐色あり、As-A少量、As-B多量含む。
- 2.10YR2/3 しまりややあり、褐色あり、As-B多量含む。
- 3.10YR2/3 しまりややあり、褐色あり、As-B多量含む、2級より黒色帯びる。
- 4.10YR2/2 しまりややあり、褐色あり、As-B多量、灰色粘土質を含む、SK6覆土。
- 5.10YR2/2 しまり強、粘り強、赤土層、SK6覆土。
- 6.10YR2/2 しまりあり、粘りあり、As-B多量含む、SK6覆土。
- 7.10YR2/2 しまりややあり、褐色あり、As-B多量含む、SD4覆土。

SD-1



第10図 SD-1号溝・SD-2号溝出土遺物

表2 SD-1・SD-2出土遺物観察表

(): 復元線。[] : 残存値を示す

遺物名	遺物No.	器様	法量 (cm)	①焼成 ②色調③胎土④残存	成・成形技法の特徴	備考
SD1	1	土師器 鉢	口径 (11.9) 底径 (6.6) 器高 (2.9)	①酸化硝 ②に灰・赤褐色 ③白色・黒色粒子 ④径 1/4	外面：口縁ヨコナサ。底部ヘラケズリ。 内面：ナサ。口縁部玉粒状に肥厚。	
	2	土師器 鉢	口径 (12.8) 底径 (7.4) 器高 (3.0)	①酸化硝 ②に灰・赤褐色 ③白色・黒色粒子 ④径 1/4	外面：口縁ヨコナサ。 内面：口縁やや内湾。ナサ。	
	3	土師器 台付鉢	口径 - 底径 - 器高 -	①酸化硝 ②に灰・赤褐色 ③白色粒子・角閃石 ④径 3/4	外面：縁粒ヘラ調整。 内面：ナサ。	
	4	須恵器 甕	口径 (28.0) 底径 - 器高 -	①還元焼 ②黄灰味 ③灰質 ④白色粒子・角閃石 ④径 1/12	外面：ロクロ整形。口縁局所上下に突出。 内面：ロクロ整形。	
	5	須恵器 甕	口径 - 底径 - 器高 -	①還元焼 ②オリーブ黒 ③白色・黒色粒子 ④焼片	外面：自然体付着。底部下湾ヘラケズリ。 内面：叩きの後、ナサ削し。	
	6	灰釉陶器 甕	口径 - 底径 (7.6) 器高 -	①還元焼 ②灰白 ③赤急粒子 ④径 1/6	外面：高台縁部ヘラケズリ。 内面：坯部灰釉。	
SD2	1	土師器 鉢	口径 - 底径 (7.6) 器高 (2.5)	①酸化硝 ②に灰・硝 ③赤褐色粒子・角閃石 ④径 1/3	外面：ロクロ整形。底部部胎土削り後、高台縁付。 内面：ロクロ整形。	
	2	須恵器 鉢	口径 - 底径 (6.6) 器高 (2.6)	①還元焼 ②黄灰 ③白色・黒色粒子 ④径 1/3	外面：ロクロ整形。底部部胎土削り後、未調整。 内面：ロクロ整形。	

3 土坑

土坑は、南調査区で13基、北調査区で1基確認された。それらは覆土により大きく二つに分けられる。SK-1・SK-2・SK-3・SK-4・SK-6・SK-14は覆土にAs-B軽石を含み、SK-5・SK-7・SK-8・SK-9・SK-12・SK-13の覆土はAs-B軽石を含まない黒褐色土を主体とする。このうちSK-5・SK-14では、その上

層で集石が認められた。なお SK-10・SK-11 は風倒木痕である。

SK-1 (第11図)

規模：長軸 1.83 m、短軸 1.21 m、深さ 40cm。

遺構所見：平面隅丸方形。断面箱形。覆土上層には As-B 軽石を多く含み、下層には明確な As-B 軽石は検出できなかった。底面は地山ローム層である。自然埋没と考えられる堆積をなす。

遺物所見：土師器 64g、須恵器 167g が覆土中から出土している。図化に及んだ遺物はない。

時期：覆土に As-B 軽石混土が認められることから中世に帰属するか。

SK-2 (第11・14図)

規模：長軸 1.13 m、短軸 1.04 m、深さ 33cm。

遺構所見：平面円形、断面逆台形。覆土には As-B 軽石を含み、自然埋没と考えられる堆積をなす。底面は地山ローム層である。

遺物所見：土師器 64g、須恵器 196g、灰輪陶器 2g が覆土中から出土しており、そのうち土師器坏 (1)・須恵器坏 (2)・須恵器壺 3点 (3・4・5) を図化した。

時期：覆土に As-B 軽石混土が認められることから中世に帰属するものと考えられる。

SK-3 (第11図)

規模：長軸 [1.16] m、短軸 [0.31] m、深さ 38cm。

遺構所見：平面円形と想定される。断面逆台形。基本土層 I - 3 層上面から掘り込まれている。覆土には As-B 軽石を多量に含んでおり、自然埋没と考えられる堆積をなす。

遺物所見：遺物は出土していない。

時期：覆土に As-B 軽石混土が認められることから中世に帰属するものと考えられる。

SK-4 (第11・14図)

規模：長軸 1.19 m、短軸 1.14 m、深さ 19cm。

遺構所見：平面円形、断面逆台形を呈する。覆土には As-B 軽石を含んでおり、自然埋没の様相を呈する。底面は地山黒褐色土層である。

遺物所見：土師器 234g、須恵器 88g が覆土中から出土している。そのうち図化したものは、須恵器壺 (1)・須恵器坏 (2) である。

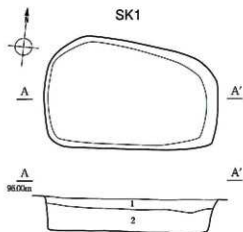
時期：覆土に As-B 軽石混土が認められることから中世に帰属するものと考えられる。

SK-5 (第12図)

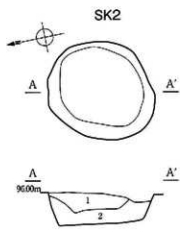
規模：長軸 1.33 m、短軸 1.07 m、深さ 31cm。

遺構所見：平面方形、断面逆台形を呈する。土坑に伴うと考えられるビットが 1 基確認でき、覆土上面から掘り込んでいる。覆土にはロームを多く含んでいることから人為堆積、埋土の可能性が高い。ビット周囲からは糠がまとまって検出され、とくに上層、2 層中に認められており、根固め石の様相が看取される。

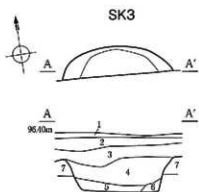
遺物所見：遺物は出土していない。



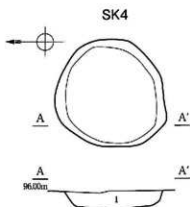
SK-1
1.10YR2/3 しまりややあり、粘性ややあり、As-B多量含む。
2.10YR2/3 しまりややあり、粘性あり、ロームブロック少量含む。



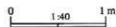
SK-2
1.10YR2/3 しまりややあり、粘性ややあり、As-B多量含む。
2.10YR2/3 しまりややあり、粘性あり、ローム粒子散在、As-B少量含む。



SK-3
1.1.10YR2/2 しまりややあり、粘性あり、As-A少量、As-B多量含む。
2.10YR2/3 しまりややあり、粘性あり、As-B多量含む。
3.10YR2/3 しまりややあり、粘性あり、ローム粒子少量、As-B多量含む。
4.10YR2/3 しまりややあり、粘性あり、ローム粒子散在、As-B多量含む。
5.10YR2/3 しまりややあり、粘性あり、ローム粒子散在、As-B多量含む、4層より黒色腐び。
6.10YR2/2 しまりややあり、粘性あり、As-B多量含む。
7.10YR2/2 しまりややあり、粘性あり、ローム粒子少量含む、且山土層を含む。



SK-4
1.10YR2/3 しまりややあり、粘性あり、As-B多量含む。



第11図 SK-1・2・3・4号土坑

時期：土坑埋土中にAs-B軽石が検出されていないことや、周辺から出土した遺物等から古代に帰属する可能性が高いと考えられる。

SK-6 (第9図)

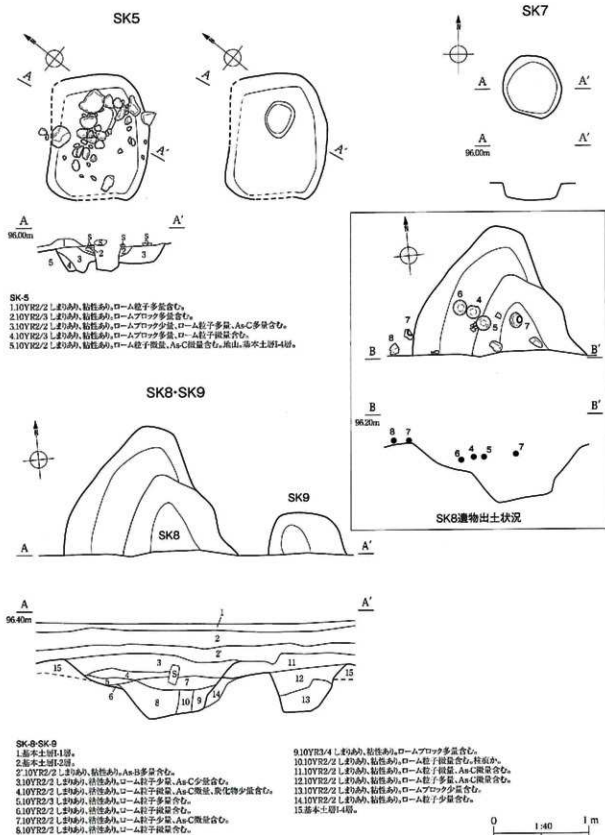
規模：長軸 [1.76] m、短軸 [0.87] m、深さ 32cm。

遺構所見：平面長方形、断面箱形を呈する。覆土にはAs-B軽石を多く包含しており、自然埋没の堆積をなす。

SD-4号溝と重複し、本溝の方が新しい。

遺物所見：遺物は出土していない。

時期：覆土がAs-B軽石混土であることから中世に帰属するものと考えられる。



第12図 SK-5・7・8・9号土坑

SK-7 (第12・14図)

規模：長軸0.66m、短軸0.63m、深さ18cm。

遺構所見：平面円形、断面逆台形を呈する。覆土は黒褐色土を主体とし、As-B軽石を含まない。平面プランは不鮮明で、人為的掘り込みとは明確には認められなかった。

遺物所見：土師器片30g、須恵器片51gが覆土中から出土し、そのうち須恵器坏(1)・須恵器坑(2)を図化した。

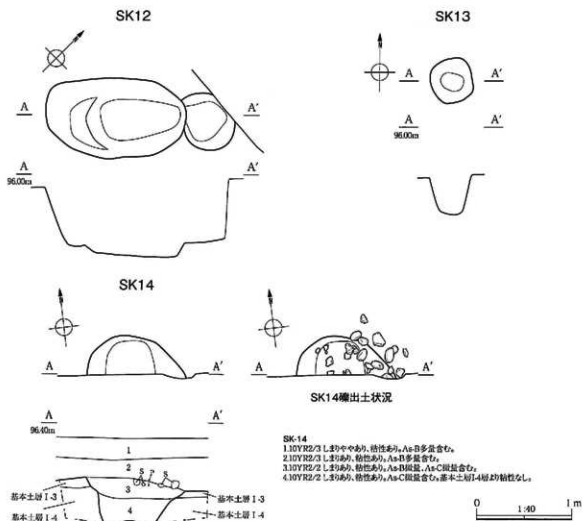
時期：覆土にAs-B軽石を含まないことから古代か。

SK-8 (第12・14図)

規模：長軸[1.84]m、短軸[1.38]m、深さ64cm。

遺構所見：平面不整形、断面逆台形を呈する。基本土層I-4層上面から掘り込んでいる。覆土は一部にAs-C軽石を含む黒色土を主体とする。明確な人為的堆積の様相は把握できなかったが、10層のような柱痕の可能性のある堆積が認められた。なお、10層下に硬化は認められなかった。層序からSK-9号土坑より新しい。

遺物所見：土師器1260g、須恵器1307gが出土している。覆土上層から土器がまとめて出土し、その出土状況から流れ込みではなく、人為的に配置したものと想定される。それらには土師器坏(1)・土師器甕(2)・



第13図 SK-12・13・14号土坑

須恵器坏（3）・須恵器壘6点（4～9）がある。

時期：遺物の帰属時期から9世紀末に位置づけられる。

SK-9（第12・14図）

規模：長軸0.82m、短軸0.45m、深さ51cm。

遺構所見：平面隅丸方形か、断面逆台形を呈する。基本土層Ⅰ-4層上面から掘り込んでいる。覆土はAs-C軽石を含む黒褐色土を主体とし、自然埋没と考えられる堆積をなす。層序関係からSK-8より古い。

遺物所見：土師器17g、須恵器41gが覆土中から出土した。そのうち図化したものは、須恵器坏（1）である。

時期：SK-8の帰属時期等からも9世紀末～10世紀に位置づけられる。

SK-10（風倒木痕）（第6・15図）

遺構所見：風倒木痕である。北西から南東方向へ倒木したものと想定される。倒木痕の黒色土中にはAs-B軽石は認められなかった。SD-1号溝と重複し、本風倒木の方が古い。

遺物所見：黒色土中から土師器123g、須恵器538gが出土し、そのうち須恵器坏（1）・須恵器壘（2）・須恵器高坏（3）・須恵器壘（4）を図化した。

時期：覆土にAs-B軽石が認められないことから、古代に帰属する可能性が考えられる。

SK-11（風倒木痕）（第6・15図）

遺構所見：風倒木痕である。南から北方向へ倒木したものと想定される。倒木痕の黒色土中にはAs-B軽石は認められなかった。SK-5号土坑と重複し、本土坑の方が古い。

遺物所見：倒木痕黒色土中から土師器114g、須恵器520g、弥生土器7gが出土している。そのうち須恵器坏（1）・須恵器壘（2）・須恵器壘（3）、弥生土器（4）を図化した。弥生土器は梅掻きによる施文が認められる。

時期：出土遺物および遺構の重複関係から古代に帰属するものと考えられる。

SK-12（第13・15図）

規模：長軸1.47m、短軸0.86m、深さ74cm。

遺構所見：平面楕円形を呈し、断面は有段の逆台形を呈する。覆土にはAs-B軽石は含まれず、明確なAs-C軽石は認められなかった。基本土層Ⅰ-4層上面から掘り込まれているものと思われるが、その上面では明確なプランは検出できなかった。柱痕は認められなかった。

遺物所見：土師器84g、須恵器95gが覆土中から出土している。いずれも小片で図化に及んだ遺物はなかった。

時期：覆土中の遺物等から古代に位置づけられる。

備考：調査時には「1号掘立SK1」とした。

SK-13（第13図）

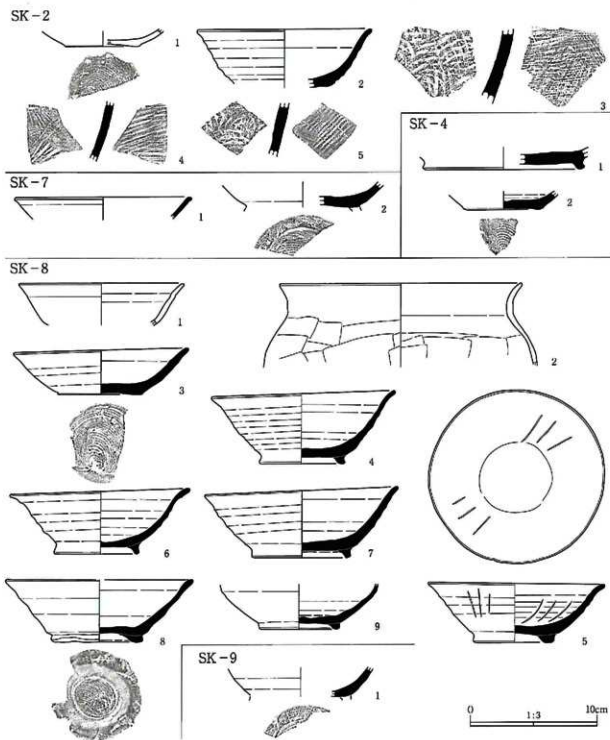
規模：径0.48m、深さ42cm。

遺構所見：平面円形、断面逆台形を呈する。ピット状の掘り込み。基本土層Ⅰ-4層から掘り込まれているが、その上面では明確な平面プランは検出できなかった。底面はローム層を掘り込んでいる。覆土はAs-B軽石を含まない黒褐色土を主体としている。底面の状況は湧水により明確には分からなかった。

遺物所見：遺物は出土していない。

時期：覆土の様相から古代に位置づけられる。

備考：調査時には「1号掘立SK 2」とした。



第14図 SK-2・4・7・8・9号土坑出土遺物

SK-14 (第13・15図)

規模：長軸 [1.05] m、短軸 [0.45] m、深さ 49cm。

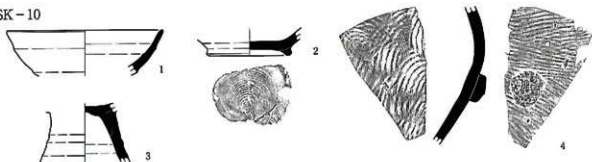
遺構所見：平面円形もしくは楕円形か。断面逆台形を呈する。基本土層 I - 3層から掘り込まれている。覆土上層には As-B 軽石を含んでいる。

遺物所見：礫が覆土上層、3層からまともに出てくる。遺物はいずれも3層から出土しており、覆土下層、4層からは出土していない。出土した遺物は土師器片 114g、須恵器片 520g で、そのうち須恵器坏(1)、須恵器壺2点(2・3)を図化した。

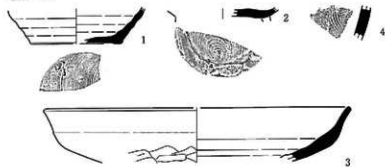
時期：As-B 軽石混土層である基本土層 I - 3層から掘り込まれており、中世に帰属する可能性が考えられる。

備考：調査時には「2号集石」とした。

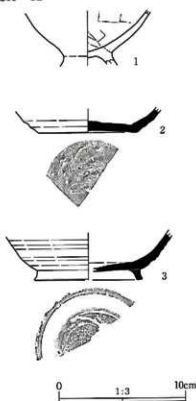
SK-10



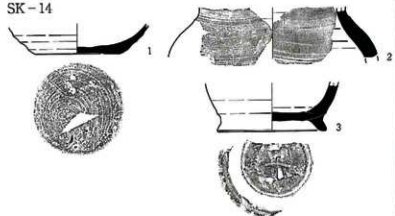
SK-11



SK-12



SK-14



第15図 SK-10・11・12・14号土坑出土遺物

表3 土坑出土遺物観察表(1)

(): 復元品, [] : 残存数を示す

遺構名	遺物No	器種	数量 (cm)	①焼成 ②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴	備考	
SK2	1	土師器 杯	口径 - 底径 6.0 器高 11.4	①焼成 ②濃褐色 ③白色粒子 ④径 1/2	外面: ロクロ整形。底部回転糸切り後、未調整。 内面: ロクロ整形。	二次的傾出か。	
	2	須恵器 埴	口径 (13.6) 底径 6.0 器高 4.7	①還元焼 ②黄褐色 ③白色粒子 ④径 1/3	外面: ロクロ整形。口縁部削り出。 内面: ロクロ整形。	瓶状の傾色を帯びる。	
	3	須恵器 埴	口径 - 底径 - 器高 -	①還元焼 ②黄褐色 ③白色粒子 ④破片	外面: カキメの底。平行明き目か。 内面: 青濁後焼て片肌。		
	4	須恵器 罎	口径 - 底径 - 器高 -	①還元焼 ②灰白 ③白色粒子 ④破片	外面: 平行明き目。自然輪付着。 内面: 青濁後焼て片肌。		
	5	須恵器 罎	口径 - 底径 - 器高 -	①還元焼 ②灰 ③白色粒子 ④破片	外面: 平行タタキ目。 内面: 出て片肌か。		
SK4	1	須恵器 埴	口径 - 底径 (12.2) 器高 11.6	①還元焼 ②黄褐色 ③白色・褐色粒子 ④径 1/3	外面: ロクロ整形。底部回転糸切り後、高台貼付。 内面: ロクロ整形。		
	2	須恵器 埴	口径 - 底径 6.0 器高 11.6	①還元焼 ②黄褐色 ③白色・褐色粒子 ④径 1/6	外面: ロクロ整形。底部回転糸切り後、未調整。 内面: ロクロ整形。		
SK7	1	須恵器 埴	口径 - 底径 - 器高 11.6	①還元焼 ②黄褐色 ③白色・褐色粒子 ④径 1/4	外面: ロクロ整形。口縁部削り出に処理。 内面: ロクロ整形。	傾斜の残あり。	
	2	須恵器 埴	口径 (13.7) 底径 - 器高 12.0	①還元焼 ②黄褐色 ③白色・褐色粒子 ④径 1/6	外面: ロクロ整形。底部回転糸切り後、高台貼付。 内面: ロクロ整形。		
SK8	1	土師器 杯	口径 (13.0) 底径 - 器高 (3.3)	①還元焼 ②黄褐色 ③白色・褐色粒子 ④径 1/6	外面: 口縁部と底部との間に強い傾色。 内面: ナメ。		
	2	土師器 埴	口径 (19.0) 底径 - 器高 (6.6)	①還元焼 ②黄褐色 ③白色・褐色粒子 ④径 1/4	外面: 口縁下部のわずかに直立。底部ヘラタズリ。 内面: 口縁コナナ。体高ヘラナメ。		
	3	須恵器 埴	口径 13.7 底径 6.4 器高 3.7	①還元焼 ②灰白 ③白色・褐色粒子 ④径 1/2	外面: ロクロ目強い。底部回転糸切り後、未調整。 内面: ロクロ整形。		
	4	須恵器 埴	口径 14.4 底径 6.4 器高 5.8	①還元焼、酸化气氛 ②黄褐色 ③白色・赤褐色粒子・角閃石 ④ほぼ全存	外面: ロクロ目強い。底部回転糸切り後、高台貼付。 内面: ロクロ整形。		
	5	須恵器 埴	口径 13.9 底径 5.9 器高 4.8	①還元焼、やや軟質 ②灰白 ③白色・灰褐色 ④全存	外面: ロクロ目強い。底部回転糸切り後、高台貼付。体部焼成後継断自立。 内面: ロクロ整形。体部焼成後継断 1/1。2ヶ所。		
	6	須恵器 埴	口径 14.2 底径 6.6 器高 5.2	①還元焼 ②灰 ③灰色・赤褐色粒子 ④全存	外面: ロクロ目強い。底部回転糸切り後、高台貼付。 内面: ロクロ整形。	器形不明。	
	7	須恵器 埴	口径 15.1 底径 7.2 器高 5.6	①還元焼、やや軟質 ②灰白 ③白色 ④径 3/4	外面: ロクロ整形。底部回転糸切り後、高台貼付。 内面: ロクロ整形。		
	8	須恵器 埴	口径 (14.7) 底径 6.8 器高 5.0	①還元焼、二次焼成 ②濃褐色 ③白色粒子・石英 ④径 2/3	外面: ロクロ整形。ロクロ目強い。底部回転糸切り後、高台貼付。高台不整形。 内面: ロクロ整形。		
	9	須恵器 埴	口径 - 底径 6.0 器高 (3.6)	①還元焼 ②灰白 ③白色粒子・石英 ④径 1/3	外面: ロクロ目強い。底部回転糸切り後、高台貼付。 内面: ロクロ整形。		
SK9	1	須恵器 埴	口径 - 底径 (2.3) 器高 (2.3)	①還元焼 ②黄褐色 ③白色粒子 ④径 1/2	外面: ロクロ整形。底部回転糸切り後、高台貼付。 内面: ロクロ整形。		
	SK10	1	須恵器 埴	口径 (12.2) 底径 - 器高 (3.6)	①還元焼、やや軟質 ②灰白 ③白色 ④径 1/6	外面: ロクロ目強い。 内面: ロクロ整形。	
		2	須恵器 埴	口径 - 底径 6.0 器高 (2.2)	①還元焼 ②黄褐色 ③白色粒子・角閃石 ④径 3/4	外面: ロクロ整形。底部回転糸切り後、高台貼付。 内面: ロクロ整形。	
	SK11	須恵器 高杯	口径 - 底径 - 器高 (4.7)	①還元焼 ②黄褐色 ③白色・褐色粒子 ④径 2/3	外面: ロクロ整形。ロクロ目強い。 内面: ロクロ整形。		
口径 - 底径 - 器高 -			①還元焼 ②黄褐色 ③白色粒子 ④破片	外面: 平行明き目。自然付着。 内面: 青濁後焼て片肌。一部ヘラナメ。			
須恵器 埴		口径 - 底径 (7.0) 器高 (2.8)	①還元焼 ②黄褐色 ③白色粒子 ④径 1/4	外面: ロクロ目強い。底部回転糸切り後、未調整。 内面: ロクロ整形。			
		口径 - 底径 - 器高 -	①還元焼 ②黄褐色 ③白色粒子・石英 ④径 1/2	外面: ロクロ整形。底部回転糸切り後、高台貼付。 内面: ロクロ整形。			

表4 土坑出土遺物観察表(2)

():復元値、[]:残存値を示す

遺構名	遺物No	部種	寸法 (cm)	①焼成 ②色洞③粘土④残存	成・整形技法の特徴	備考
SK11	3	須恵器 壺	口径 (23.8) 底径 - 器高 [4.3]	①還元焼 ②灰白 ③白色・黒色粒子 ④径 1/8	外側:口縁ヨコナデ。体部ヘラナズリ。 内側:ロクロ整形。	
	4	須恵器 壺	口径 - 底径 - 器高 -	①還元焼 ②灰白 ③白色粒子 ④破片	外側:唇縁による傾斜直線文に傾斜直線文を施す。 内側:ナデ。	
SK12	1	土師器 高杯	口径 - 底径 - 器高 [4.2]	①還元焼 ②灰白 ③白色・黒色粒子 ④径 1/4	外側:ナデ。唇縁ヨコナデ。 内側:坏部ヘラナデ。	
	2	須恵器 壺	口径 (7.8) 底径 7.8 器高 [1.9]	①還元焼 ②灰白 ③向左右 ④径 1/3	外側:ロクロ目筋い。底部頸部糸切り後、未調整。 内側:ロクロ整形。	
	3	須恵器 壺	口径 (8.6) 底径 8.6 器高 [3.9]	①還元焼 ②灰白 ③白色・黒色粒子 ④径 1/2	外側:ロクロ整形。底部頸部糸切り後、高台輪付。 内側:ロクロ整形。	
SK14	1	須恵器 壺	口径 (6.7) 底径 6.7 器高 [2.4]	①還元焼 ②灰白 ③白色粒子 ④破部完全	外側:ロクロ整形。底部頸部糸切り後、未調整。 内側:ロクロ整形。	
	2	須恵器 壺	口径 - 底径 - 器高 -	①還元焼 ②灰白 ③白色粒子 ④径 1/8	外側:肩部外縁カキメ。 内側:ナデ。	下部破断面として再 利用か。
	3	須恵器 壺	口径 (8.4) 底径 8.4 器高 [3.8]	①還元焼 ②灰白 ③白色・黒色・褐色粒子 ④径 3/4	外側:ロクロ整形。体部下側ナズリ。底縁高台輪付。 内側:ロクロ整形。	

4 遺構外出土遺物

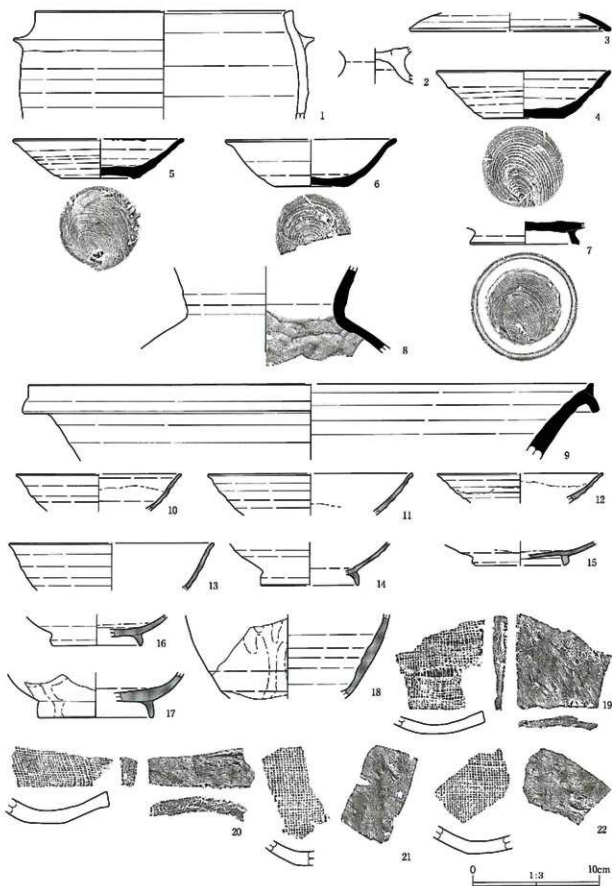
遺構外から多くの遺物が出土している。ただしそれらはいずれも基本土層Ⅰ・Ⅲ層・Ⅱ・Ⅳ層上面から出土しており、それより下層ではいさゝか出土しなかった。また遺物の多くが磨滅しており、流水等による流れ込みの可能性が考えられる。遺物はおもに南調査区西部の微高地上、南調査区の東、低地部南側から出土している。低地部中央から北側は一線を画したように遺物が出土しておらず、後世の水田耕作等による攪拌も想定されたが、明確な要因は分からなかった。

出土した遺物は7世紀代のもの(3)も認められるが、9・10世紀のものを主体としており、遺構出土の遺物と大差ない。また瓦が4点出土しており、18・19・21は低地部から出土している。

表5 遺構外出土遺物観察表(1)

():復元値、[]:残存値を示す

遺構名	遺物No	部種	寸法 (cm)	①焼成 ②色洞③粘土④残存	成・整形技法の特徴	備考
遺構外	1	土師器 須恵器	口径 (30.2) 底径 - 器高 [8.6]	①還元焼 ②灰白 ③白色粒子・片岩 ④径 1/12	外側:ロクロ整形。唇部傾斜ナズリ。 内側:ロクロ整形。口縁部高台をもつ。	
	2	土師器 高杯	口径 - 底径 - 器高 [2.9]	①還元焼 ②灰白 ③白色粒子・角閃石 ④径 1/3	外側:回転ナデ整形。 内側:ナデ。	
	3	須恵器 壺	口径 (16.0) 底径 - 器高 [1.4]	①還元焼 ②灰白 ③白色粒子 ④径 1/8	外側:ロクロ整形。 内側:ロクロ整形。かえり接合しない。	
	4	須恵器 壺	口径 (13.7) 底径 13.7 器高 3.8	①還元焼 ②灰白 ③白色・黒色粒子 ④径 2/3	外側:ロクロ目筋い。底部頸部糸切り後、未調整。 内側:ロクロ整形。	
	5	須恵器 壺	口径 (13.3) 底径 6.2 器高 3.2	①還元焼 ②灰白 ③白色粒子 ④径 2/3	外側:ロクロ整形。底部頸部糸切り後、未調整。 内側:ロクロ整形。口縁部高台状の持ち手。	
	6	須恵器 壺	口径 (13.4) 底径 5.7 器高 3.7	①還元焼 ②灰白 ③白色・赤褐色粒子 ④径 1/3	外側:ロクロ目筋い。底部頸部糸切り後、未調整。 内側:ロクロ整形。	
	7	須恵器 壺	口径 - 底径 8.6 器高 -	①還元焼 ②灰白 ③白色・黒色粒子 ④破片	外側:底部頸部糸切り後、高台輪付。 内側:ロクロ整形。	
	8	須恵器 壺	口径 (8.9) 底径 - 器高 [8.9]	①還元焼 ②灰白 ③白色・黒色粒子 ④径 1/3	外側:ロクロ整形。 内側:肩部当て片。	



第16圖 遺構外出土遺物

表6 遺構外出土遺物観察表(2)

(): 復元値, [] : 採存数を示す

遺構名	遺物No	器種	法量 (cm)	①地蔵 ②色澤 ③胎土 ④内底	底・整形技法の特征	備考
遺構外	9	灰器 壺	口径 (64.2) 底径 - 器高 (8.0)	①還元焼 ②灰白 ③白色・赤褐色粒子 ④破片	外底: ロクロ整形。口縁部上部に突出。 内底: ロクロ整形。	
	10	灰釉陶器 甕	口径 (13.0) 底径 - 器高 (2.9)	①還元焼 ②黄灰 ③白色・黒色粒子 ④径 1/5	外底: ロクロ整形。 内底: ロクロ整形。輪漉け削け。	
	11	灰釉陶器 甕	口径 (16.0) 底径 - 器高 (3.1)	①還元焼 ②灰白 ③白色・黒色粒子 ④径 1/5	外底: ロクロ整形。口縁部わずかに肥厚。 内底: ロクロ整形。輪漉け削け。	
	12	灰釉陶器 甕	口径 (13.0) 底径 - 器高 (2.3)	①還元焼 ②黄灰 ③白色・黒色粒子 ④径 1/4	外底: ロクロ整形。輪漉け削け。 内底: ロクロ整形。	
	13	灰釉陶器 甕	口径 (16.0) 底径 - 器高 (3.2)	①還元焼 ②灰白 ③白色・黒色粒子 ④径 1/5	外底: ロクロ目録。 内底: ロクロ整形。	
	14	灰釉陶器 甕	口径 (7.0) 底径 - 器高 (3.4)	①還元焼 ②灰 ③白色粒子 ④径 1/3	外底: ロクロ整形。高台直立気味。 内底: ロクロ整形。	
	15	灰釉陶器 甕	口径 - 底径 (7.0) 器高 (1.9)	①還元焼 ②灰白 ③白色・黒色粒子 ④径 1/5	外底: ロクロ整形。輪漉け削け。高台部は後をなす。 内底: ロクロ整形。	
	16	灰釉陶器 甕	口径 - 底径 (7.0) 器高 (2.5)	①還元焼 ②灰白 ③白色・黒色粒子 ④径 1/3	外底: ロクロ整形。高台部後をなす。 内底: ロクロ整形。輪漉け削け。	
	17	灰釉陶器 甕	口径 - 底径 (9.0) 器高 (3.4)	①還元焼 ②黄灰 ③白色・黒色粒子 ④径 1/4	外底: ロクロ整形。高台高い。輪漉け削け。 内底: ロクロ整形。	
	18	灰釉陶器 甕	口径 - 底径 - 器高 -	①還元焼 ②灰白 ③白色・黒色粒子 ④破片	外底: ロクロ整形。下半ヘラクスリ。輪漉け削け。 内底: ロクロ目録。	
	19	瓦 平瓦	長さ 幅 厚さ 0.8	①酸化焼 ②緑 ③白色・赤褐色粒子・角閃 石 ④破片	断面: 春目肌。端面ヘラクスリ。 凸面: 叩きの後、ナデ。	
	20	瓦 平瓦	長さ 幅 厚さ 1.2	①酸化焼 ②緑 ③白色・赤褐色・黒色粒子 ④破片	断面: 春目肌。端面ヘラクスリ。 凸面: 叩きの後、ナデ。	
	21	瓦 平瓦	長さ 幅 厚さ 1.1	①酸化焼 ②緑 ③白色・赤褐色粒子 ④破片	断面: 春目肌。 凸面: 叩きの後、ヘラナデ。	
	22	瓦 平瓦	長さ 幅 厚さ 1.0	①酸化焼 ②緑 ③白色・赤褐色粒子・石英 ④破片	断面: 春目肌。 凸面: 叩きの後、ヘラナデ。	

VI まとめ

本調査で確認された遺構は、土坑および溝であり、住居跡は確認されなかった。ただし流入してきたものと想定される遺物は相当量あり、近隣に住居跡等が存在する可能性は非常に高いものと考えられる。出土した遺物は9・10世紀代のものを主体とし、弥生土器少量、7世紀代および近世のものも認められた。

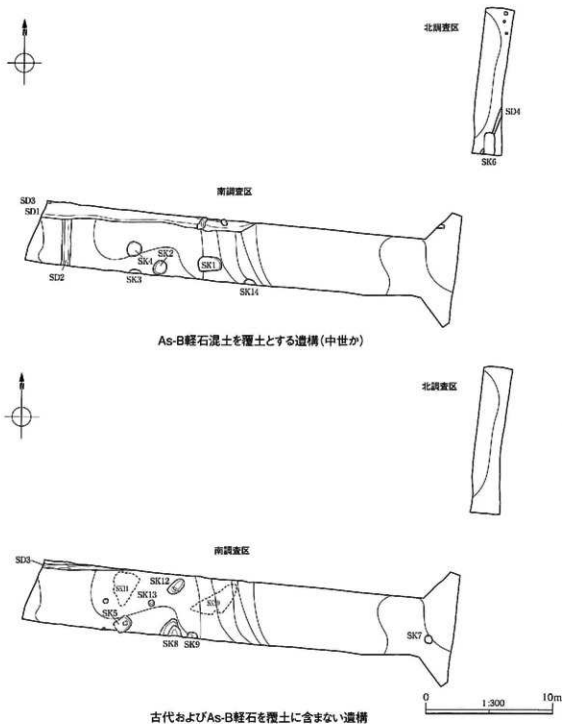
調査において確認された各遺構は、覆土にAs-B 軽石を含むものと含まないものと大きく分けられた。前者はいずれも帰属する遺物を伴っていないが、おおよそ中世のものと想定される。後者はおもに9世紀を主体とする古代に位置づけられる。

まず前者の中世に位置づけられるものには、SD-1号溝がある。その全容は不明であるが、東西にまっすぐ走った後、北方向へ屈曲する可能性が想定された。SD-2号溝はSD-1号溝に切られるが、その覆土から中世に位置づけられるものと想定される。幅110cm・深さ53cmの小規模なもので、大規模な区画はなさないうのである。またSK-14号土坑からは集石が認められた。帰属する遺物、さらには焼土・炭等も検出されておらず、その性格は不明である。

これらの遺構に伴う遺物は確認できなかつたため詳細な時期は不明だが、遺跡東側にあるとされる貝沢八幡原敷との関連性が想定される。調査区東側に南北に走る市道は、貝沢八幡原敷敷の外郭西端と想定されてい

るが、今回の調査においてはその形跡は確認できなかった。

次に古代に位置づけられるものはおもに土坑である。SD-3号溝もその覆土から古代に位置づけられる可能性が高い。SK-5号土坑は根固め状の礫を有する方形の土坑で、柱痕と考えられるピットも検出された。掘立柱建物跡の可能性が高く、周囲にはSK13・SK12が並ぶものの明確な掘立柱建物跡は推定できなかった。ただし南調査区東側で出土した瓦等を加味するとこの一帯に掘立柱建物および瓦葺建物などの建物群が存在した可能性が考えられる。それらの性格を示すような遺物は出土していないが、灰釉陶器片が相対的に多く出土している点は特筆される。



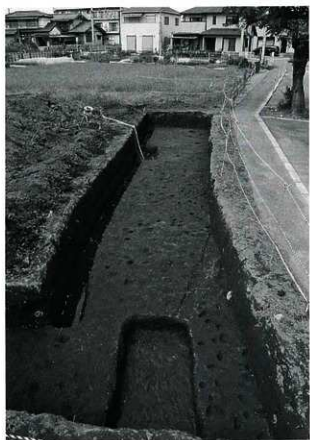
古代およびAs-B軽石を覆土に含まない遺構

第17図 時期別遺構分布図

写真図版



南調査区全景



北調査区全景



南調査区西部全景



SD-1・SD-3号溝全景



SD - 2号溝全景



SD - 4号溝・SK - 6号土坑全景



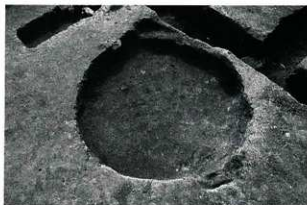
SK - 1号土坑全景



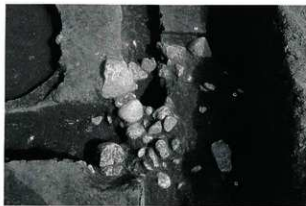
SK - 2号土坑全景



SK - 3号土坑全景



SK - 4号土坑全景



SK - 5号土坑覆検出状況



SK - 5号土坑断割状況



SK - 8号土坑遺物出土状況



SK - 8号土坑全景



SK - 12号土坑全景



SK - 14号土坑全景



SK - 14号土坑土层断面



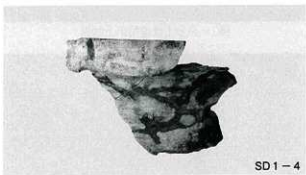
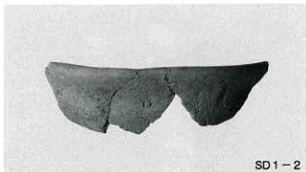
SK - 9号土坑全景

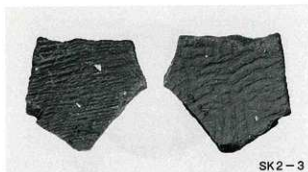


基本土层 I

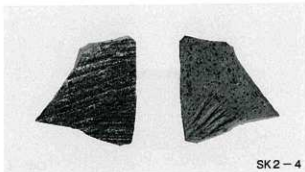


基本土层 II

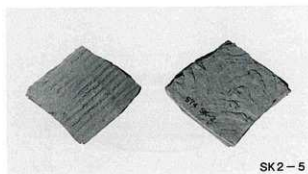




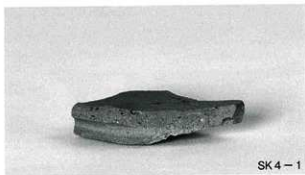
SK2-3



SK2-4



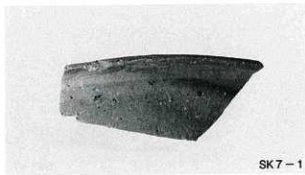
SK2-5



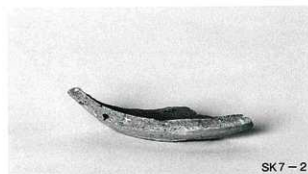
SK4-1



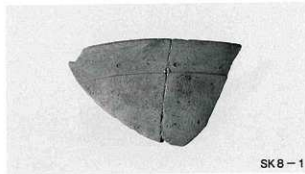
SK4-2



SK7-1



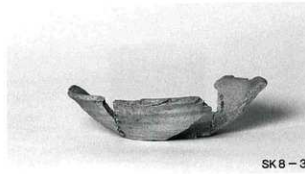
SK7-2



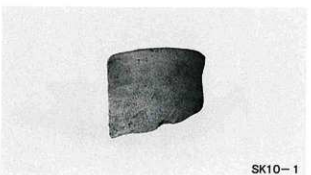
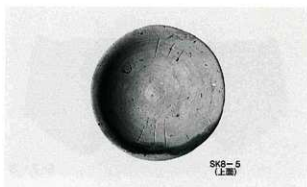
SK8-1

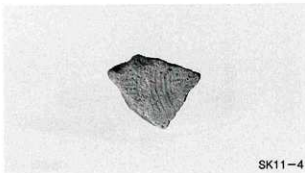
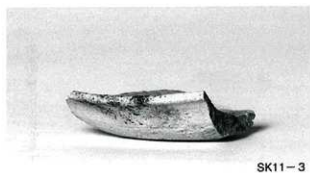
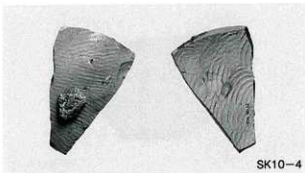


SK8-2



SK8-3



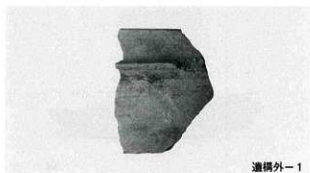




SK14-2



SK14-3



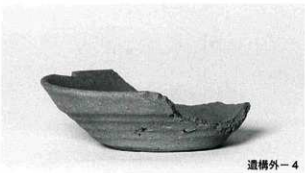
遺構外-1



遺構外-2



遺構外-3



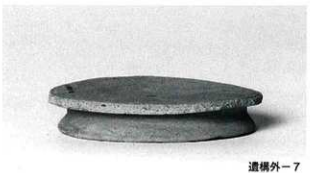
遺構外-4



遺構外-5



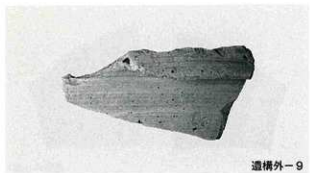
遺構外-6



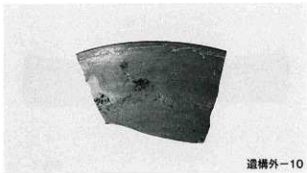
遺構外-7



遺構外-8



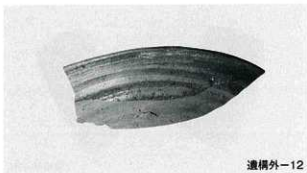
遺構外-9



遺構外-10



遺構外-11



遺構外-12



遺構外-13



遺構外-14



遺構外-15



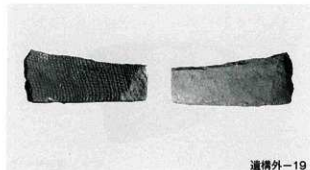
遺構外-16



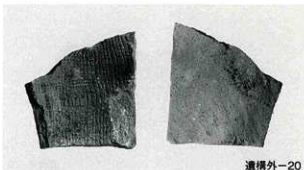
遺構外-17



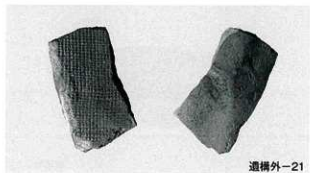
遺構外-18



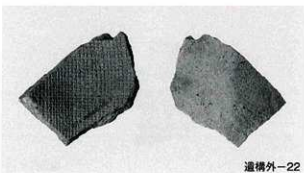
遺構外-19



遺構外-20



遺構外-21



遺構外-22

報告書抄録

フリガナ	カイザワ・シマイセキ
書名	貝沢・島遺跡
副書名	宅地分譲工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第331集
編著者名	石丸敦史
編集機関	有限会社 毛野考古学研究所 〒379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地1 Tel. 027-265-1804
発行機関	有限会社 毛野考古学研究所
発行年月日	平成26年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
貝沢・島遺跡	群馬県高崎市 貝沢町字島792番地2、792番地6	102020	574	36° 20' 38"	139° 00' 59"	20130917 ～ 20131010	230.56㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
貝沢・島遺跡	集落	古代 中世	溝 土坑 ピット	4条 14基 3基	土師器 須恵器 灰輪陶器 瓦	

高崎市文化財調査報告書第 331 集

貝沢・島遺跡

— 宅地分譲工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

平成 26 年 3 月 20 日印刷

平成 26 年 3 月 25 日発行

編集 / 有限会社毛野考古学研究所
発行 / 有限会社毛野考古学研究所
印刷 / 朝日印刷工業株式会社
